



第303図 SK17～SK23位置図

SK20(図版19 附表45)

検出状況 南地区北西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK18の南側、SK20の北側に位置する(第303図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向における規模は1.21m、その直交方向で58cmを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯と碗の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。碗は外面に赤彩が認められる。

須恵器 碗が1個体(547)出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK21(図版19 附表45)

検出状況 南地区北西部に位置する(第289図)。SK19の北東側に位置する(第303図)。平面形は隅丸長方形傾向にあり、主軸方向で1.10m残存し、その直交方向で80cmを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯と壺が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は口縁部片と底部片が出土している。底部片は回転糸切りにより切り離され、外面に赤彩が認められる。壺は口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は壺Ecと類似する形態である。体部片は丸胴タイプで、内外面ともナデにより仕上げられている。外面には煤、内面には焦げの付着が認められる。

須恵器 杯A(548)と杯B(549)が出土している。548は杯Afに分類され、底部がヘラにより切り離され、ナデが加えられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。549は碗Ba6に分類される。底部はヘラ切り後ナデを加え、その後高台が貼り付けられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK22(図版19 附表45)

検出状況 南地区北西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK23の南西側に位置する(第303図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形傾向にあり、その規模は主軸方向で1.00m、その直交方向で61cmを測る。

出土遺物 須恵器の壺が1個体(550)出土している。550は壺Nの底部と考えられ、底部から体部にかけて残存する。体部は、外面が平行叩き、内面が横ナデの後、内外面が回転ナデにより仕上げられている。体部外面下端は強い回転ヘラ削りにより仕上げられている。底部は未調整である。

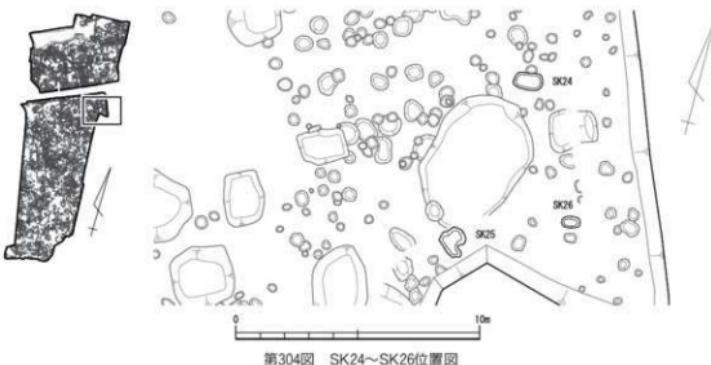
時 期 出土遺物から南構Ⅵ期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK23(図版19 写真図版84 附表45)

検出状況 南地区北西部に位置する(第289図)。第2次調査で検出した遺構である。SK22の北東側に位置する(第303図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は方形傾向にあり、その規模は主軸方向で80cm、その直交方向で75cmを測る。

出土遺物 須恵器の杯Bが1個体(551)出土している。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



SK24(図版19 附表45)

**検出状況** 南地区北東部に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK26の北西側に位置する(第304図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、その規模は主軸方向で1.20m、その直交方向で70cmを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 壺の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。口縁部片は壺Gdに分類されるものである。体部片は、外側がハケ、内側がヘラ削りにより仕上げられている。

**須恵器** 梗が1個体(552)出土している。杯の可能性も考えられる。

**時期** 出土遺物から南構Ⅱ-Ⅰ期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK25(図版19 附表45)

**検出状況** 南地区北東部に位置する(第289図)。第9次調査で検出された遺構である。SK26の南西側に位置する(第304図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は方形傾向にあるが、不定形である。その規模は主軸方向で1.00m、その直交方向で1.15mを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 高杯・杯・壺が出土している。高杯は553の脚裾部が出土している。外側はヘラミガキ、内面は横方向のハケ、端部は横ナデにより仕上げられている。杯と壺については小片のため図化できなかった。杯は体部片が出土しており、外側に赤彩が認められる。壺は、壺Ecに分類される口縁部片が出土している。

**須恵器** 杯・壺・梗が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は体部から底部にかけて残存する小片である。壺と梗は体部の小片が出土しており、壺の外側は叩き整形後カキ目により仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。

**時期** 出土遺物から南構Ⅱ-Ⅰ期に位置付けられる(第6章第2節)。

## SK26(図版19 附表45)

検出状況 南地区北東部に位置する(第289図)。第9次調査で検出された遺構である。SK24の南東側、SK25の北東側に位置する(第304図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は梢円形をなし、その規模は主軸方向で77cm、その直交方向で48cmを測る。

出土遺物 土師器の杯と壺が出土しているが、杯については小片のため固化できなかった。口縁部片が出土している。壺は、壺Ebに分類される口縁部片(554)が出土している。口縁部はく字形に屈曲し、端部を抑えるような横ナデにより外方に肥厚している。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後横ナデ、内面は体部が横方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構IV期に位置付けられる(第6章第2節)。



第305図 SK27・SK28・SK33・SK34位置図

**SK27**

**検出状況** 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK28の北側にある(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸方形傾向にあり、その規模は主軸方向で1.00m、その直交方向で90cmを測る。

**出土遺物** 土師器の甕・杯・高坏が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

甕は甕Baと甕Gaに分類される口縁部の小片が出土している。前者は小型で薄手の土器である。杯は、体部の小片で、内外面に赤彩が認められる。薄手の製品である。高坏は坏部の小片が出土している。

**時期** 出土遺物から南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK28(図版19・75 附表45・103)**

**検出状況** 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK27の南側、SK33・SK34の北側に位置する(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は梢円形をなし、その規模は主軸方向で1.13m、その直交方向で89cmを測る。

**出土遺物** 土器と石製品が出土している。

**土器** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 杯と皿が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は体部片が、皿は底部片が出土している。皿は精良な胎土である。

**須恵器** 杯蓋(555)・杯A・杯・甕が出土している。杯蓋は、口縁端部に内傾する端面がわずかに認められる。他の器種については小片のため図化できなかった。杯Aは底部片が、杯は口縁部片が出土している。甕は体部片が出土しており、外面はナデにより仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。石製品 磨石が1点(S10)出土している。厚みのある扁平な自然石を利用したもので、完存する。扁平な2面に使用痕が認められる。

**時期** 出土遺物のなかで、杯蓋については他の土器と比較して明らかに古く位置付けられるものである。このため、南構Ⅶ～Ⅹ期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK29(図版19 写真図版149 附表45)**

**検出状況** 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK30の北西側に位置する(第306図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸三角形をなし、その規模は主軸方向で1.10m、その直交方向で55cmを測る。

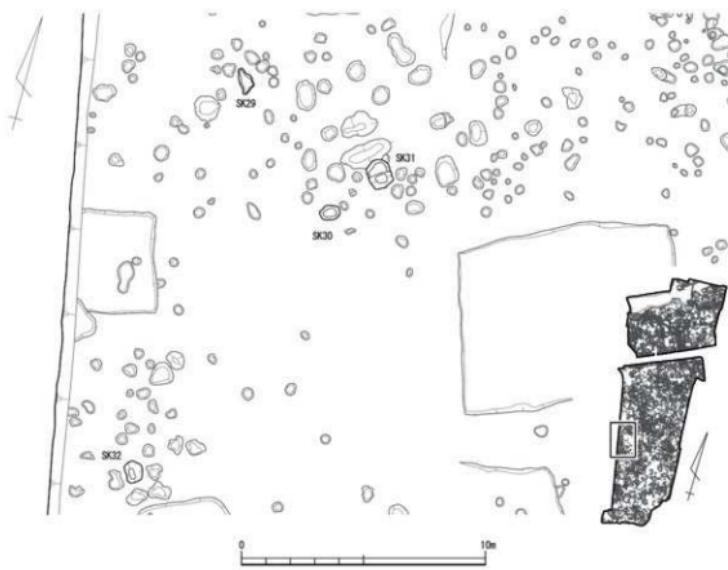
**出土遺物** 土師器・縁釉陶器・黒色土器が出土している。

**土師器** 甕の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**縁釉陶器** 底部から口縁部にかけて残存する557の1個体である。輪45に分類され、綫やかに内済傾向をなす体部に対し、口縁部が外方に短く屈曲している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内外面に釉が掛けられている。底部の残存がわずかであるためその形態は明確ではないが、平高台の可能性が高い。焼成は軟陶である。

**黒色土器** 556の杯1個体が出土している。体部から口縁部にかけて残存し、外面は回転ナデにより、内面は横方向を主体としたヘラミガキにより仕上げられている。内面のみ黒化している(杯A)。

**時期** 出土遺物の特徴から南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第306図 SK29～SK32位置図

## SK30(図版19 写真図版84 附表45)

検出状況 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK29の南東側、SK31の南西側に位置する(第306図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、その規模は主軸方向で81cm、その直交方向で60cmを測る。

出土遺物 土師器の壺1個体(558)が出土している。壺Fbに分類される。やや長胴気味の体部に対して口縁部がく字形に屈曲し、端部が上方に摘み上げられている。体部外面はハケ、内面は斜方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、内面が横方向のハケ、外側が横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物の特徴から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

## SK31(図版20 写真図版45・84 附表45)

検出状況 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出した遺構である。SK30の北東側に位置する(第306図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸方形傾向にあり、主軸方向で1.20m、その直交方向で95cmを測る。横断面は皿状に近く、最深部における検出面からの深さは25cmである。

本遺構を検出した面の中央部から、土師器の鍋(559)が押しつぶされた状態で出土している(第307図)。さらにこの鍋を取り上げ後、その下層から土師器の杯(560)が出土している。

出土遺物 土師器の鍋(559)と杯(560)が出土している。鍋は鍋Bに分類され、半球形の体部に口縁部が「く」字形に屈曲している。体部外面を縱方向のハケ、体部内面を横方向のハケの後ヘラナデを加え、

最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

杯は杯Ad7に分類される。底部がわずかに残存し、ヘラ切りにより切り離されている。体部から口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物の特徴から、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK32(図版20 写真図版84 附表45)

検出状況 南地区中央部西側に位置する(第289図)。

第1次調査で検出された遺構である。SK35の北西側(第289図)、SK30の南西側(第306図)に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向で90cm、その直交方向で70cmを測る。

出土遺物 須恵器の壺(561)が出土している。底部はヘラ切り後ナデ、体部内外面は回転ナデにより仕上げられている。底部から体部にかけての器壁が厚く仕上げられている。小瓶の底部の可能性も考えられる。

時 期 出土遺物の特徴から、南構Ⅶ期～Ⅷ期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK33

検出状況 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK34の南西側に位置する(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、主軸方向で1.20m、その直交方向で80cmを測る。

出土遺物 土師器の杯が出土しているが、小片のため図化できなかった。内外面に赤彩が認められる。

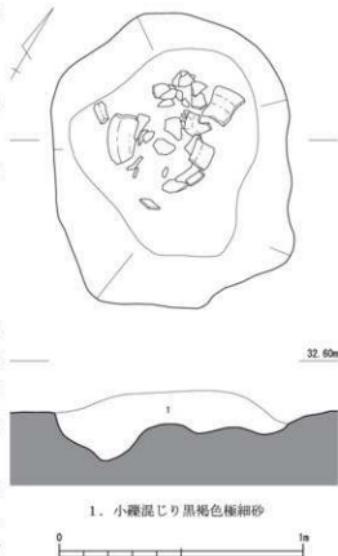
時 期 出土遺物の特徴から、南構Ⅷ期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK34(図版20 附表45)

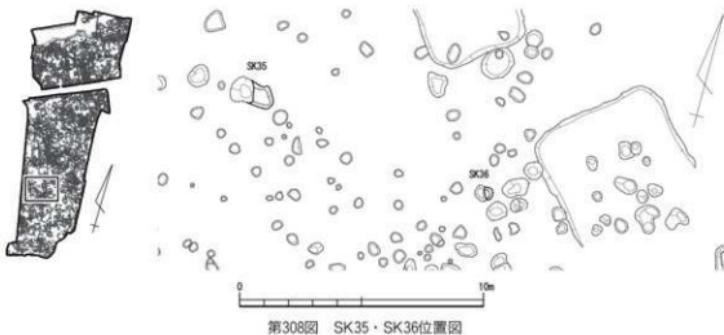
検出状況 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK33の北東側に位置する(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長椭円形をなし、主軸方向で1.10m、その直交方向で50cmを測る。横断面は皿状をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。遺構内には黒褐色極細砂～細砂1層が堆積していた。

出土遺物 土師器の楕(562)が出土している。楕Cbに分類されるもので、底部は平底をなし、回転系切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物の特徴から、南構Ⅸ-3期に位置付けられる(第6章第2節)。



第307図 SK31



## SK35(図版20 附表45)

**検出状況** 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK36の北西側に位置する(第308図)。柱穴と切り合い関係にあり、これに切られている。このため約1/3を欠く。平面形は隅丸長方形をなすものと考えられ、主軸方向で1.10m残存し、その直交方向で85cmを測る。

**出土遺物** 須恵器の杯蓋(563)が出土している。口縁部を中心に残存し、口縁部は短く下方に屈曲傾向にある。

**時期** 出土遺物の特徴から、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

## SK36

**検出状況** 南地区中央部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK35の南東側に位置する(第308図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ隅丸方形をなし、主軸方向で73cmを測る。

**出土遺物** 土師器の壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。体部片が出土しており、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

**時期** 出土遺物の特徴から、南構Ⅳ-Ⅵ期に位置付けられる(第6章第2節)。

## SK37(図版20 附表45)

**検出状況** 南地区中央部東側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK38の北西側に位置する(第309図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ隅丸方形をなし、主軸方向で1.35m、その直交方向で1.15mを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 壺が出土している。図化できたのは564の1個体である。壺Gに分類され、体部から口縁部にかけて残存する小型の壺である。外面は体部が指オサエの後口縁部にかけて横ナデ、内面は体部が横方向のヘラ削りの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

**須恵器** 杯の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。焼成がやや不良である。

**時期** 出土した須恵器の特徴から、南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第309図 SK37・SK38・SK43位置図

SK38(図版20 写真図版84 附表45)

**検出状況** 南地区南東部東端に位置する(第289図)。第9次調査で検出された遺構で、SK37の南東側、SK43の北東側に位置する(第309図)。調査区より東側へ拡がっており、検出できたのは全体の約1/2に限られる。平面形はやや歪んだ隅丸方形をなし、主軸方向で1.20m、その直交方向で65cm残存する。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 壺と高杯が出土しているが、図化できたのは壺の565に限られる。565は壺類に分類され、球形の体部に口縁部が大きく外反する比較的大型の壺である。外面は、体部が斜方向の後不定方向のハケ、口縁部が縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向もし

くは斜方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

この他、甕Gaに分類される口縁部片が出土している。また、高环は脚端部片が出土している。

須恵器 杯もしくは杯蓋・高杯・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯もしくは杯蓋は、口縁部のみの残存のため、器種の特定が困難である。高杯は杯部と脚部の接合部が出土している。甕は体部の小片が出土しており、内外面がナデにより仕上げられている。

時期 出土した須恵器の特徴から、南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK39(図版20 附表45)

検出状況 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK40の西側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、主軸方向で1.02m、その直交方向で82cmを測る。

出土遺物 須恵器の杯A(566)が出土している。杯Amに分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。体部と底部の境外面には回転ヘラナデが加えられている。

時期 出土した須恵器の特徴から、南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第310図 SK39～SK42・SK44～SK47位置図

## SK40(図版20 附表45)

**検出状況** 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK39の東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、主軸方向で1.10m、その直交方向で78cmを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 鍋と甕が出土している。鍋は568の1個体で、鍋Aaに分類される。口縁部を中心に残存する。外面は体部から口縁部にかけてハケ、内面は体部が横方向のヘラ削り後ナデ、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。最後に、口縁端部を中心に内外面が横ナデにより仕上げられている。甕については体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

**須恵器** 杯B蓋(567)と甕が出土している。567は口縁部を中心に残存する。内面に朱墨の付着が認められ、硯として転用されたものと考えられる。蛍光X線分析の結果、ベンガラとの分析結果が得られている(第5章第8節)。甕は体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面は叩き整形、内面はナデにより仕上げられている。

**時期** 出土した須恵器の特徴から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

## SK41(図版82 写真図版194 附表100)

**検出状況** 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK46の西側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向で1.25m、その直交方向で80cmを測る。

**出土遺物** 磨石(S43)が出土している。紡錘形をなす自然石を利用したもので、その先端部に摩滅痕が認められる。一部に赤色顔料と考えられる付着が認められる。

**時期** 時期の特定は困難である。

## SK42(図版20~22 写真図版84~86

附表45・46)

**検出状況** 南地区南半部に位置する(第289

図)。第1次調査で検出された遺構である。

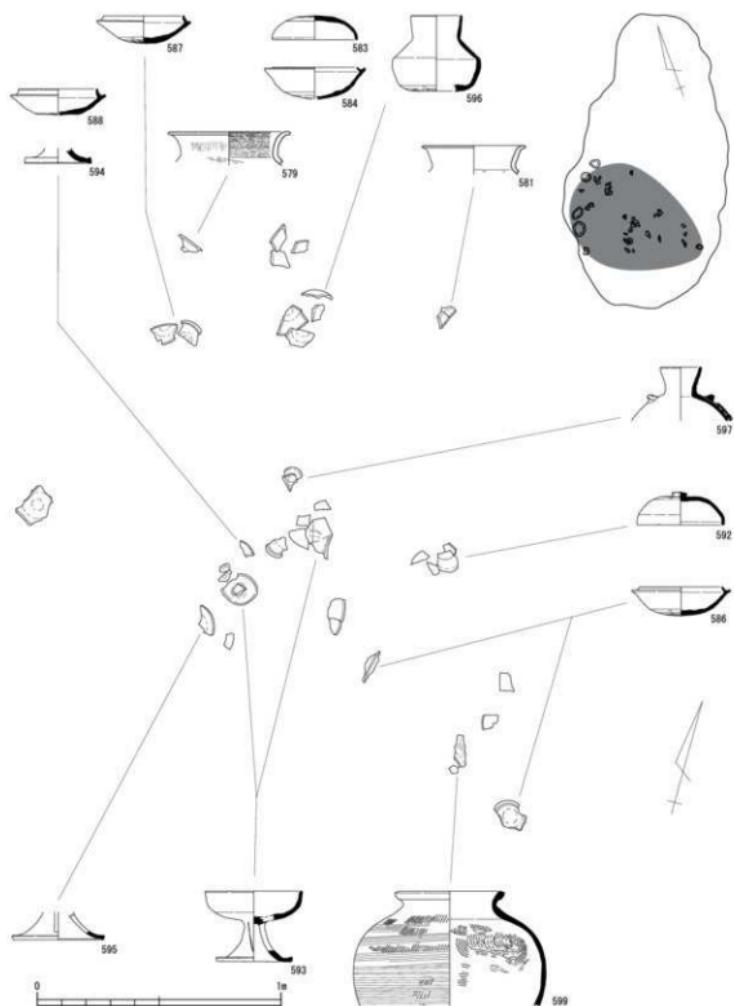
SK40の南東側・SK46の北側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。当初は竪穴住居跡の可能性が高いものとして調査を進めていったが(第311図)、平面形および肩部の特徴から本書では土壌として報告する。



第311図 SK42

平面形は楕円形傾向にあり、主軸方向で11.70m、その直交方向で6.50mを測る。横断面は皿状に近く、最深部における検出面からの深さは40cmである。埋土は黒色極細砂～細砂1層が堆積していた。

本遺構を検出した面から、比較的多くの土器が出土している(第312図)。須恵器を中心とし、形態をとどめた状態で出土していることから、意識的に廃棄されたものと考えられる。



第312図 SK42 土器出土位置

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺・小型壺・杯が出土している。小型壺については体部の小片で、図化できなかった。

杯は569の1個体である。杯Cdに分類されるもので、内外面とも横ナデにより仕上げられ、その後内面には放射状の暗文が施されている。また体部下端には横向方向のハケ目が認められる。

壺は570～581の12個体図化している。壺Edと壺Daが出土している。

甕Edは570～577・580の9個体で、口縁部が「く」字形をなしている。いずれも体部内面を横方向のヘラ削り、外面を縱方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。574と575の口縁部内面は横ナデの前に横方向のハケが行われている。後者のタイプは、基本的な調整は前者と同じである。このなかで578と579の口縁部内面は、横方向のハケが顕著に認められる。580の外面のハケについては、体部から口縁部にかけて連続するものではなく、体部が横方向、口縁部が縱方向とその向きが異なっている。

甕Daは578・579・581の3個体で、頭部が直立するタイプである。578の頭部内面にはヘラ先の当たりが認められる。578の外面のハケについては、体部から口縁部にかけて連続するものではなく、体部が横方向、口縁部が縱方向とその向きが異なっている。

須恵器 杯蓋・杯・高杯蓋・高杯・壺・甕が出土している。

杯蓋は582と583の2個体を図化した。天井部が残存する583は杯蓋rに分類され、強い回転ヘラ削りの後ナデにより仕上げられている。

杯は584～591の8個体を図化した。杯e3・杯e4・杯c7・杯f・杯g2・杯i3・杯j5が出土している。

杯e3は584の1個体である。杯e4は589の1個体である。ともに底部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。589については底部のヘラ削りが粗く、全体的に器壁が厚く仕上げられている。内面には當て具痕が認められる。

杯c7は586の1個体である。底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯fは591の1個体である。底部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。底部のヘラ削りは、一部静止ヘラ削りにより仕上げられている。仕上げは丁寧とは言い難い状況である。591の底部外面上はヘラ記号が認められる。

杯g2は587と590の2個体である。両個体とも体部との境に回転ヘラ削りが施されている。退化削りと考えられる。590の底部外面上にはヘラ記号が認められる。

杯i3は585の1個体である。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

杯j5は588の1個体である。底部はヘラ切り後未調整である。

高杯蓋は592の1個体である。完存する個体で、杯蓋を基本形としている。天井部には擬宝珠形に近いつまみが貼り付けられている。天井部の1/3が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

高杯は593～595の3点であるが、594と595は脚部のみの残存である。594は脚部Dbに、595は脚部Bに分類される。

593は無蓋高杯Hdに分類される。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられているが、杯底部外面上は回転ヘラ削りにより仕上げられている。脚部上側には、ヘラ先による切込みが2か所相対する位置に認められる(写真図版86)。切込みは長さ4.90cm・5.00cmを測り、貫通する。また幅1mm～1.5mmと、鋭利な工具によるものである。この他595の脚部には方形の透かしが1か所残存する。

壺は596と597の2個体が出土している。596は直口壺で、底部から口縁部にかけて残存する。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられているが、底部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。

597は提瓶の上半部である。回転ナデを基調としているが、体部内面はナデにより仕上げられている。肩部には耳が貼り付けられている。粘土塊を貼り付けたものである。外面には縱方向のカキ目がわずかに認められる。

甕は598と599の2個体が出土している。598は口縁部を欠き、肩部と下半部を図上復元したものであ

る。外面は叩き整形後カキ目が施され、内面には当て具痕が顕著に認められる。599は壺Fcに分類され、体部中位以上が残存する。口縁端部は肥厚し、断面方形をなす。調整は598と同じで、口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土した土器から、南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK43(図版22 附表46)

検出状況 南地区南東部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK38の南西側に位置する(第309図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長梢円形をなし、主軸方向で1.03m、その直交方向で65cmを測る。

出土遺物 土師器の壺(600)が出土している。壺Ibに分類され、長胴タイプの壺と考えられる。頭部から口縁部にかけて残存する。外面は、頭部がナデ、口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。内面は、頭部から口縁部にかけて横方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

時 期 出土した土器の壺から、南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK44(図版22 附表46)

検出状況 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK45の南西側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸方形をなし、主軸方向で95cm、その直交方向で85cmを測る。

出土遺物 土師器の壺(601)が出土している。壺Fbに分類され、口縁部が残存する。口縁部内面を横方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。端部はわずかに沈線状をなしている。

時 期 出土した土器から、南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK45(図版22 附表47)

検出状況 南地区南部中央に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK41の南東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は梢円形をなし、主軸方向で90cm、その直交方向で70cmを測る。

出土遺物 土師器の椀Bと壺が出土している。杯Aは602の1点が出土している。椀Bb2に分類される。底部は回転糸切りにより切り離され、他は回転ナデにより仕上げられている。

壺は体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土した土器から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK46(図版22 附表46)

検出状況 南地区南部中央に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK45の北東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は梢円形をなし、主軸方向で82cm、その直交方向で65cmを測る。

出土遺物 土師器の杯・杯A・壺が出土している。図化できたのは杯の603に限られる。体部から口縁部にかけて残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯Aと壺については小片のため図化

できなかった。杯Aは底部が残存し、回転糸切りにより切り離されている。甕は体部片が出土しており、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土した土器から南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK47(図版22 附表46)

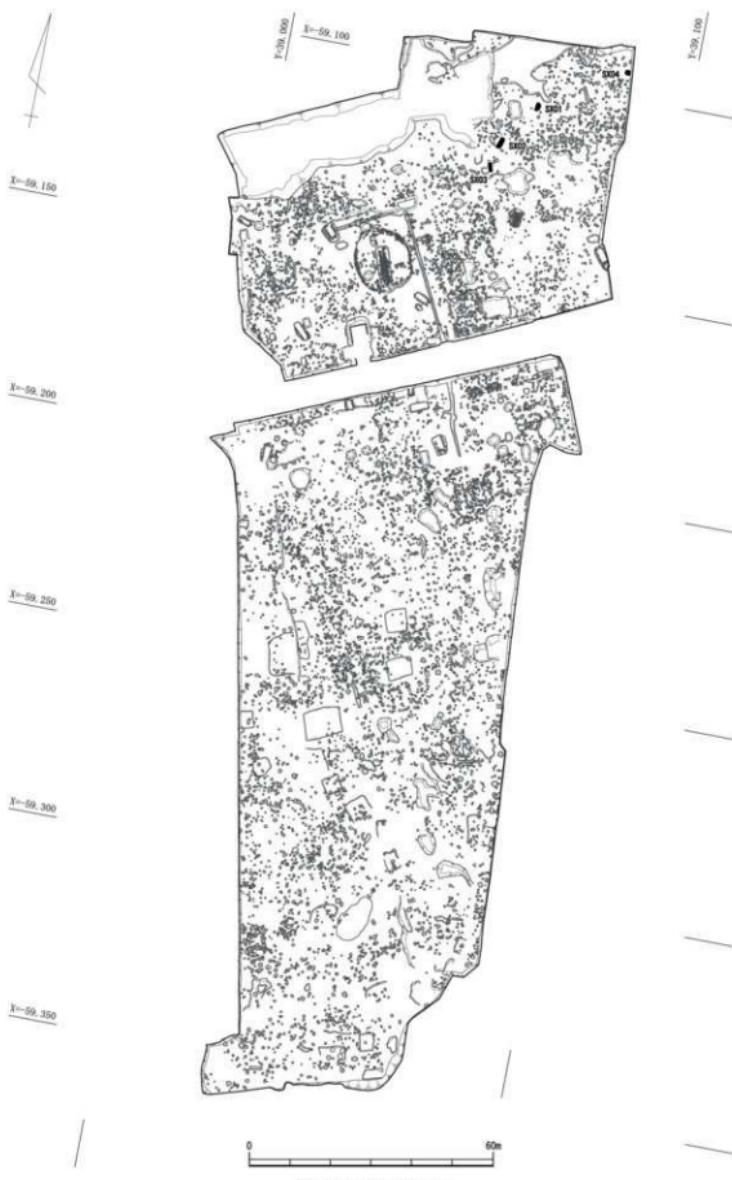
検出状況 南地区南部中央に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK45の南東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸三角形をなし、主軸方向で1.75m、その直交方向で86cmを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 瓢と杯Aが出土している。瓢(604)は瓢Cdに分類され、広口瓢に近い形態をなし、体部から口縁部にかけて残存する。体部内面は縦方向の指ナデにより仕上げられている。外面は頸部が横ナデにより仕上げられているが、他は摩滅のため観察できない。杯Aは底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器 杯Aの底部片が出土している。小片のため図化できなかったが、底部はヘラ切りにより切り離されている。

時 期 出土した土師器の瓢と他の土器とは時期差が認められる。須恵器の杯Aの出土から、南構Ⅶ～Ⅸ期に位置付けられる(第6章第2節)。



第313図 木棺墓位置図

## 第6節 木棺墓

### 1. はじめに

4基(SX01～SX04)検出している(第313図)。いずれも北地区北東部で検出されている。4基はその主軸方位を異にするが、時期はほぼ同じものと考えられる。

### 2. SX01(写真図版47)

**検出状況** 北地区北東部に位置する。第4次調査で検出された遺構である。SX02の北東側に位置する(第313図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。埋葬主体は箱形木棺と考えられる。

**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなすが、北辺はやや弧状をなしている。その規模は、主軸方向で1.75m、その直交方向で85cm～90cmを測る。検出面からの深さは10cmである。

棺は墓壙内のほぼ中央部に位置し、北側小口は環が置かれていた。その規模は主軸方向で1.20mを測る。小口の規模は、北側で35cm、南側で34cmとほぼ同じである。このため、小口の規模から頭位を判断することは困難である。また棺検出面からの深さは7cmで、北側と南側でのそのレベルは同じである。

**出土遺物** 土器等の遺物は全く出土していない。

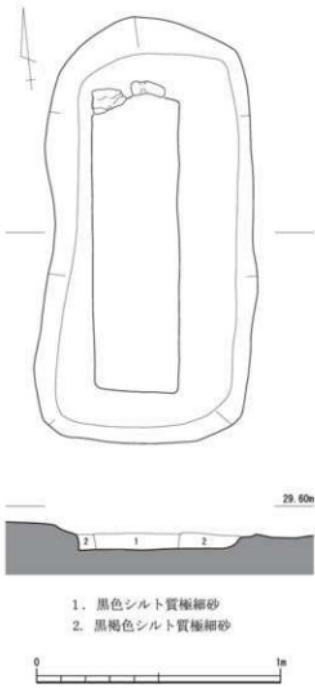
**時期** 出土遺物から時期を判断することは困難である。他の木棺墓の時期から、南構Ⅱ期に位置付けられる(第6章第2節)。

### 3. SX02(写真図版47)

**検出状況** 北地区北東部に位置する(第313図)。第4次調査で検出された遺構である。SX01の南西側、SX03の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。埋葬主体は箱形木棺と考えられる。

**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなすが、北辺と南辺はやや弧状をなしている(第315図)。その規模は、主軸方向で2.60m、その直交方向で95cmを測る。検出面からの深さは22cmである。棺は墓壙内のほぼ中央部で検出されている。ただし、中央部は明確に検出することができなかった。棺の周囲、特に南側を中心に環が置かれていた。一部は棺材を固定するためのものと考えられる。

棺の規模は主軸方向で2.00mを測る。小口の規模は、北側で15cm、南側で22cmと、南側の方がやや広い傾向にある。ただし、北側小口については棺周囲の環の影響も考えられることから、小口の規模から頭位を判断することは困難である。また棺検出面からの深さは20cmで、北側と南側でそのレベルは同じ

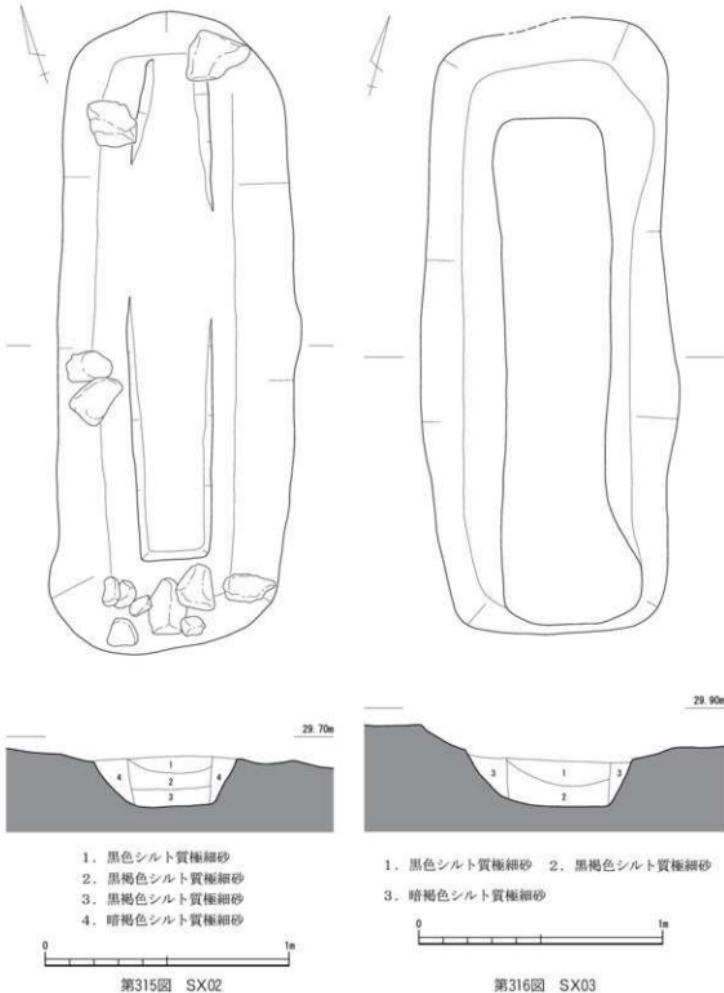


第314図 SX01

である。

**出土遺物** 当遺構内からは土器等の遺物は全く出土していない。

**時期** 出土遺物から時期を判断することは困難である。他の木棺墓の時期から、南構Ⅱ期に位置付けられる。



## 4. SX03(写真図版47)

**検出状況** 北地区中央部東側に位置する。第4次調査で検出した遺構である。SX02の南西側にあたる(第313図)。墓壙の北側の一部が遺構に切られている以外、全体が検出されている。

**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなす(第316図)。その規模は、主軸方向で2.50m、その直交方向で1.05mを測る。検出面からの深さは33cmである。棺は箱形木棺と考えられ、墓壙内の南側に若干寄った位置で検出され、南側はその輪郭が不鮮明となっている。このため小口の規模から頭位を判断することは困難である。その規模は主軸方向で2.07mを測る。小口の規模は北側で40cmを測る。棺検出面からの深さは18cmで、北側と南側でそのレベルは同じである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時期** 遺物が出土していないため、他の木棺墓の時期から南構Ⅱ期に位置付けられる。

## 5. SX04(図版22 写真図版47)

附表46)

**検出状況** 北地区北東隅に位置する。

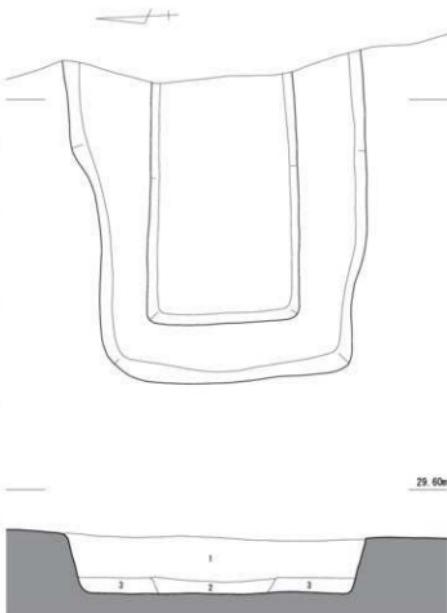
第9次調査で検出した遺構である。

SX01の北東側にあたる(第313図)。全体の約1/2が東側調査区外へ抜がってある。埋葬主体は箱形木棺と考えられる。

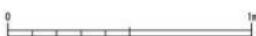
**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなす。その規模は、主軸方向で1.30m残存し、その直交方向で1.20mを測る。墓壙内では棺を検出することができ、主軸方向で1.00m残存し、その直交方向で60cmを測る。棺検出面から棺底までの深さは6cmである。

なお、後述する出土土器について、棺内・棺外を含めた具体的な出土位置については不明である。

**出土遺物** 埋土内から高環と壺が出土しているが、壺については小片のため図化できなかった。無形壺の口縁部片が出土している。高環は608の1個体が出土している。体部に対して口縁部が外反気味に直立するものである。口径14.20cmと小型の高環である。外面は横



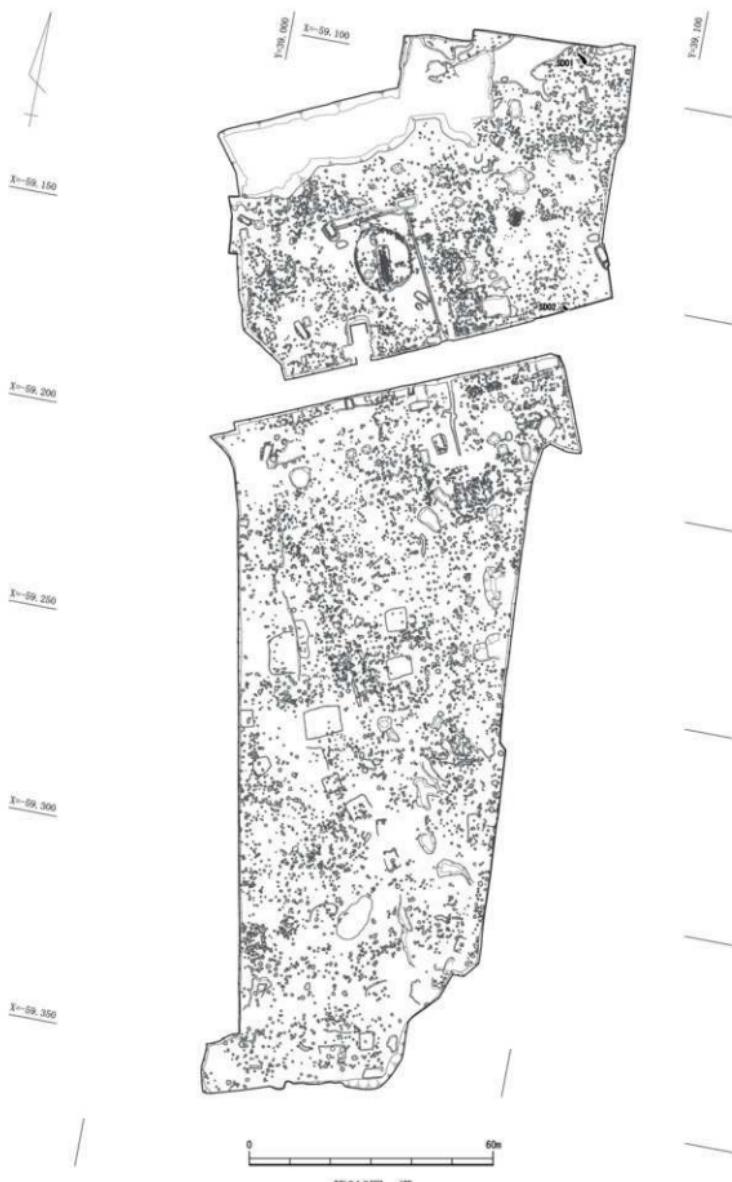
1. 黒褐色シルト質極細砂
2. 暗黒褐色シルト～極細砂
3. 黒褐色シルト混じり極細砂



第317図 SX04

方向のヘラミガキにより仕上げられているが、内面については摩滅のため観察できない。

**時期** 出土遺物から南構Ⅱ期に位置付けられる(第6章第2節)。



第318図 溝

## 第7節 溝

### 1. はじめに

溝状遺構については、SD01とSD02の2本に限られる。いずれも北地区で検出されている(第318図)。

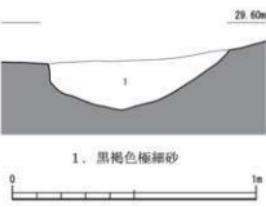
### 2. SD01(図版22 附表46)

検出状況 北地区北東隅に位置する(第318図)。第4次調査で

検出された遺構である。北西-南東方向にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。わずかに弧状をなし、その長さは3.00mを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである(第319図)。埋土は黒褐色極細砂1層からなる。

出土遺物 埋土内から土師器の甕(605)が出土している。甕Ibに分類され、口縁部のみ残存する。外面はハケの後内外面とも横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構V-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第319図 SD01横断面

### 3. SD02(図版22 写真図版86 附表46)

検出状況 北地区南東隅に位置する(第318図)。第9次調査で検出された遺構である。北西-南東方向にのびる溝で、北端は後世の擾乱により切られ、南側は調査区外までのびている。わずかに弧状をなし、検出した長さは1.25mを測る。横断面は逆台形をなし、幅は58cmを測る。最深部における検出面からの深さは24cmである。埋土は黒褐色極細砂1層からなる。

出土遺物 埋土内から土師器と須恵器が出土している。

土師器 皿と甕が出土している。皿は606の1個体が出土している。皿Aa1に分類され、底部から口縁部にかけて残存する。口径18.95cmと復元される大型の皿である。底部の残存がわずかであるため、高台の有無は判断できない。底部外面は横方向の静止ヘラ削り、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。外面には赤彩が認められる。

甕は図化できたのは607の1個体である。甕Acに分類される、口縁部片から体部にかけて残存する個体である。外面は、体部から口縁部にかけて縱方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、口縁部が斜方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

この他、図化できなかったが、甕の口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は、わずかに残存する体部から丸胴タイプと考えられる。体部片は、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 甕の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。体部片は、外面が叩きにより整形され、内面には当て具痕が認められる。

時期 出土遺物から南構V-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第320図 遺物出土地点

## 第8節 その他の

### 1. はじめに

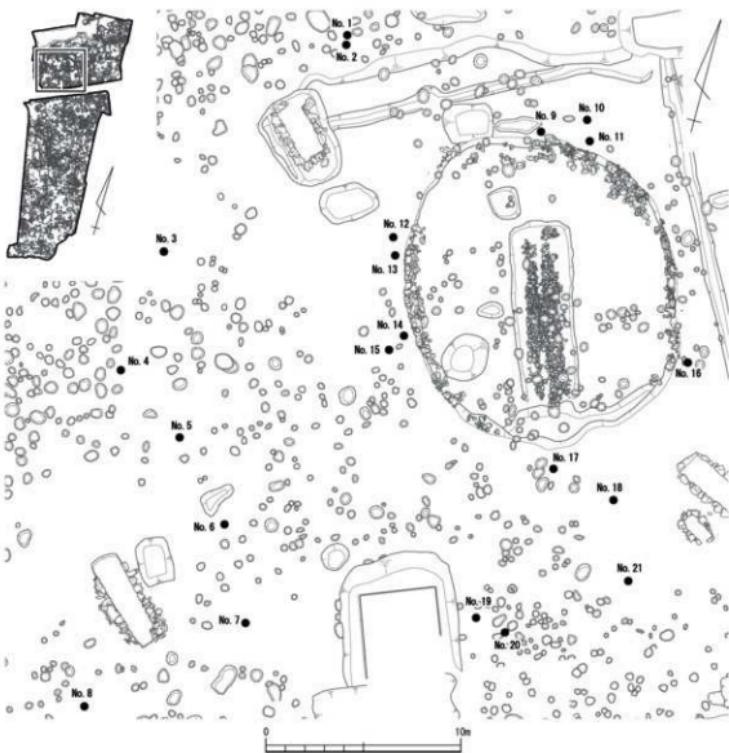
遺構には伴わないが良好な状態で出土した遺物について、出土位置・レベルをトータルステーションを使用して正確に記録していった。これらの遺物についても、基本層序および調査方法を考慮に入れる(第3章第1節)、本来は遺構に伴っていたものと考えられる。したがってこれらの遺物についても、遺構出土遺物に準じるものとして報告していくこととする。なお上記の遺物のなかで、平面的な出土位置と遺構の平面的な位置が重なったものについては、当該遺構出土遺物として扱っている。

### 2. 土器出土地点

報告するのは、No.01地点からNo.81地点の81地点である(第320図)。

No.01地点(図版23 写真図版48・87 附表47)

検出状況 北地区北西部(第320図)、No.02地点の北側に近接している(第321図)。須恵器の杯(611)が單



第321図 No.1地点～No.21地点位置図

独で出土している。611は上下が逆になり、土圧で押しつぶされた状態で出土している。近接するNo02地点から出土している杯蓋(612)と、セットであった可能性も考えられる。

出土遺物 杯(611)が出土している。杯c9に分類され、底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### No02地点(図版23 写真図版48・87 附表47)

検出状況 北地区北西部(第320図)、No01地点の南側に近接している(第321図)。612が単独で出土している。土圧で押しつぶされた状態で出土している。No01地点出土の杯(611)とセットであった可能性も考えられる。

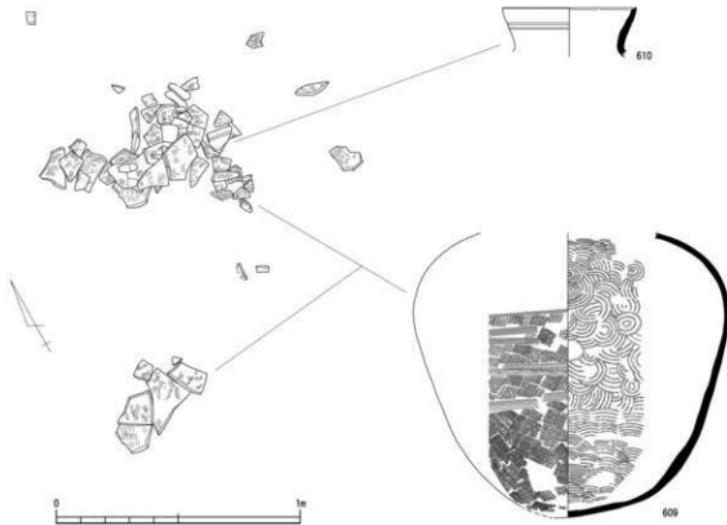
出土遺物 須恵器の杯蓋(612:杯蓋n)が出土している。天井部は弱いヘラナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構V期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### No03地点(図版22・23 写真図版48・87 附表47)

検出状況 北地区西部中央(第320図)、No04地点の北側に位置する(第321図)。須恵器の甕(609・610)が破片となって出土している(第322図)。甕は大きく2箇所で集中して出土している。出土した甕は、口縁部片(610)と体部片(609)からなるが、その出土状況から本来は1個体であった甕がその場で押しつぶされたものと考えられる。

出土遺物 須恵器の甕が出土している。口縁部片(610)と体部片(609)からなり、直接の接合関係が認められなかつたため別個体として報告するが、本来は同一個体であったものと考えられる。



第322図 No03地点土器出土状況

610は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する端面を有する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、口縁部外面に2条の沈線が施されている。609は頭部以下が残存する。外面は叩き整形後部分的にカキ目が施され、内面には当て具痕が顕著に残存する(第323図)。

時期 出土遺物から南構VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### No.04地点(図版23 写真図版49・87 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.03地点の南側、No.05地点の北西側に位置する(第321図)。613が単独で、完存した状態で出土している。

出土遺物 須恵器の杯蓋(613)が出土している。杯蓋Y5に分類され、天井部外面1/3はヘラ切り後未調整である。

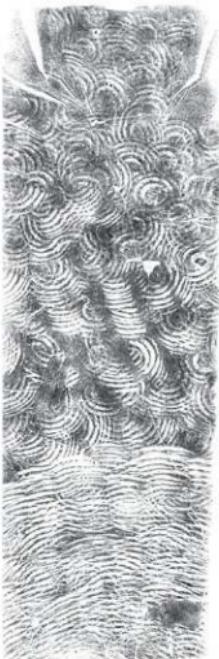
時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる。

#### No.05地点(図版23 写真図版49・87 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.04地点の南東側、No.06地点の北西側に位置する(第321図)。614が単独で、完存した状態で出土している。正立した状態での出土状態である。

出土遺物 須恵器の小瓶(614)が出土している。口縁部の一部を欠く以外完存する。卵形の体部に口縁部が短く直立する。回転ナデにより仕上げられている。体部外面には3条の沈線が施されている。底部の切り離しはヘラ切りにより、その後ナデが加えられている。

時期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる。



第323図 609内面拓影

#### No.06地点(図版23 写真図版87 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.05地点の南東側、No.07地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の高杯(615)が出土している。脚部のみ残存する。無蓋高杯Eの脚部で、脚Aaに分類される。残存する限りにおいて、透かしは認められない。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### No.07地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区南西部(第320図)、No.06地点の南東側、No.08地点の北東側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の杯A(616)が単独で出土している。杯Abに分類され、底部はヘラ切りにより切り離されている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### No.08地点(図版23 写真図版88 附表47)

検出状況 北地区南西隅(第320図)、No.07地点の南西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の甕(617)が単独で出土している。底部から体部が完存する。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、その後下半外面が回転ヘラ削りにより仕上げられている。体部中位や上側には1条の沈線が施され、この沈線上に径1.40cmの円孔が穿たれている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No09地点(図版23 写真図版49 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No10地点の南西側に位置する(第321図)。須恵器の壺(618)が単独で出土している。壺Kの頭部と考えられる。

出土遺物 618は長頸壺の頭部で、中位以下に2条の凹線が施されている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No10地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No09地点の北東側、No11地点の北西側に位置する(第321図)。土師器と須恵器が小片で散乱した状態で出土している。

出土遺物 土師器と須恵器が出土しているが、図化できたのは須恵器の杯B(619)に限られる。杯Bcに分類され、内湾気味の体部に対して口縁部が屈曲し、受け口状をなす点が特徴である。底部は、ヘラ切り後に高台が貼り付けられている。

この他土師器の杯Aと壺が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No11地点(図版23 写真図版49・88 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No09地点・No10地点の南東側に位置する(第321図)。620が内面を上側にして、単独で出土している。

出土遺物 須恵器の杯蓋(620)が出土している。杯蓋Y3に分類され、天井部は回転ヘラ切り後、ナデにより仕上げられている。焼成が不十分な製品である。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No12地点(図版23 附表48)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No13地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の杯B(621)が出土している。杯Ba8に分類される。体部から口縁部にかけて直線的である。底部はヘラ切り後ナデにより仕上げられ、その後高台が貼り付けられている。最後に高台周囲が回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

No13地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No12地点の南東側、No14地点の北西側に位置する(第321図)。

出土遺物 須恵器の椀B(622)が出土している。椀Ba1に分類され、口径16.80cm、器高7.60cmと大型の椀である。底部は高台が貼り付けられた後、回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

## No14地点(図版23 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No13地点の南東側、No15地点の北東側に位置する(第321図)。

出土遺物 土師器の甕(623)が出土している。甕Gcに分類され、体部上半から口縁部にかけて残存する。外面は、体部が輻方向のハケ、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が斜方向のヘラ削り、頭部が横ナデ、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

## No15地点(図版23 写真図版88 附表47)

検出状況 北地区中央部に位置する(第320図)。No14地点の南西側に位置する(第321図)。頭部以下の甕(624)が完存した状態で単独で出土している。当地は南構1号墳の西側据部にあたることから、624が当該古墳に伴うものであった可能性も考えられる。

出土遺物 須恵器の甕(624)が出土している。甕Dに分類される。底部が平底傾向にあり、体部は玉葱形をなす。体部中位以上は回転ナデにより、体部下半以下は回転ヘラ削りにより仕上げられている。体部中位には1条の凹線が施され、その位置に径8mmの透かし孔が開けられている。また頭部にも1条の凹線が認められる。頭部外面には絞り痕が認められる。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

## No16地点(図版23 写真図版49 附表47)

検出状況 北地区中央部(第320図)、No17地点の北東側に位置する(第321図)。625が須恵器の甕と隣接して出土している。比較的の形が保たれた状態で出土している。

出土遺物 須恵器の杯B(625)が出土している。杯Ba11に分類され、底部は回転ヘラ切り後、高台が貼り付けられている。

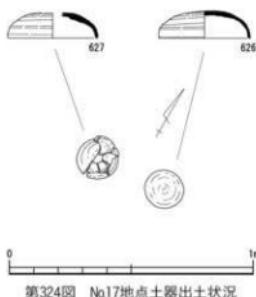
時期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

## No17地点(図版23 写真図版49・88 附表47)

検出状況 北地区中央部南側に位置する(第320図)。No18地点の北西側に位置する(第321図)。須恵器の杯蓋が2個体、ほぼ形が保たれた状態で出土している(第324図)。出土地点が南構1号墳石室入口に近接し、土器の時期及び出土状態から、南構1号墳に伴う遺物と考えられる。詳細については第4章第2節にて詳述する。

出土遺物 須恵器の杯蓋が2点(626・627)出土している。2個体とも回転ナデを基調とし、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。626は杯蓋iに、627は杯蓋rに分類される。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる。



第324図 No17地点土器出土状況

## No18地点(図版23 写真図版49・89 附表47)

検出状況 北地区中央部南側(第320図)、No17地点の南東側に位置する(第321図)。628が完存し、單独で正位の状態で出土している。